

さざなみの森

スタッフの集合知でハザード箇所を分析 保護者との協働でポジティブ空間に転換

保育環境づくりのポイント

時間の余裕が少ないスタッフの知恵をITも活用して集積。現場の実感に基づく危険箇所を、保護者ボランティアや地域の方の手を借りて、遊びの場に作り変えた。

～こどもたちのこの力を育みたい～

□感じる・気付く力 ☒うごく力 □考える力
☒やりぬく力 □人とかかわる力

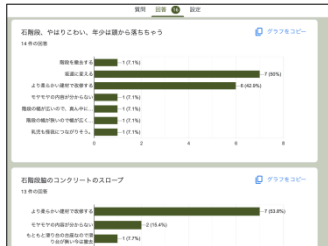
取組み内容



子どもには予測できない突発的な危険(ハザード)がある箇所を、スタッフに列挙してもらい、園庭の図上にマッピング。事故が起こった場合の重大さで環境改善の優先度を決定。



通称「石階段」はコンクリート製という素材の特質上、転倒時の怪我の程度がひどくなりやすい。また、上から下まで連続して落下する可能性があることも、(特に乳児担当)スタッフの心配の種だった。



勤務シフトのばらつきがあるため、集まって改善策を話し合う時間がとれないことも、環境改善を妨げる一端だった。ある程度具体的な改善案を提示した上で、さらに意見を求めるアンケートを実施。



木材を覆い被せて素材を転換すること、高低差による動きを誘発する「斜面」「段差」を作ることという2つのアイデアを採用。「無有建築工房」の玉井淳さんにイメージ図を描いてもらう。



園スタッフや保護者ボランティアの手で施工しやすいツーバイフォー材という木材を使用。材料を実際の現場に置いてイメージを確認し、検討・調整を繰り返しながら、作業を進めた。



スタッフ11名、保護者16名、卒園児2名、地域の方2名が作業に参加。木工の経験は様々だったが、それぞれの持てる力を出してくれた。凹凸や傾きのある場所に、水平を基本とする構造を作ることの難しさを実感しつつ、予定を大幅にオーバーし、暗くなるまで作業を行った。



完成した空間は、今は「目新しさ」の段階にあり、作り手である大人が狙った範疇のことが起こっている。その意味で「遊具」の域を出ていない。子ども達の生活の場となり、子ども達が遊びを生み出す場となることが期待される。



＜今回の取組みを通して＞
 ネガティブな側面を持つ空間を、発想と人の手の力で、ポジティブな空間にできるという経験が、環境の作り手としての自信になりました。
 担当 関口 道彦